

# ARTICLE

## 人生100年時代の学び —大学でのリカレント教育とその 可能性を考える—

音楽キャリアデザイナー・国立音楽大学教授 久保田慶一

### □人生100年時代

「人生100年時代」というフレーズは、2019年でもう少々使い古された感がある。もともとは、ロンドン・ビジネススクールとともに教鞭をとるリンダ・グラットン（1955）とアンドリュー・スコット（1965）が2016年に出版し、世界中でベストセラーになった『ライフシフト100年時代の人生戦略』（東洋経済新報社）—原題は“The 100-Year Life: Living and Working in an Age of Longevity”の題名に由来する。ふたりの予測では、2107年には今年2019年に生まれた人が88歳になる年—には、先進国では50%以上の人が100歳以上生存しているという。

ふたりは、現代社会、というよりは

高齢化社会に生きる、あるいはこれから生きていかなければならない我々に、多くの示唆を与えてくれたが、本論のテーマに関して重要な指摘は、人生100年時代になって、労働期と余生期がともに長くなっていくだけでなく、これらふたつのライフステージの中に、短い教育期—この時期を彼らは「探索期」と呼んでいる—が断続的に生じて、ライフステージが細分化していくだろうという指摘であろう。

具体例で想像してみると、大学卒で就職した人が、仕事上の必要から夜間大学院に通ったり、あるいは転職を目的に大学院に進学したり、あるいは、65歳で退職した人が大学（院）に進学

して、これまでの職業人生で学んだこ

とを研究したり、新たな—あるいはずっと抱いていた—関心から大学で教育を受けたりということが起こり、またそのようなことが必要となってくるだろうというのである。大学（院）に入學しなくても、カルチャーセンター、公共施設で開催される講座やセミナーなど、ごく短期の教育機会を利用することや自宅でのEラーニングなども、ここには含まれるであろう。

このような学びの多様化はこれまで「生涯学習」の関連で言及されてきたが、このような新しい学びが転職、新たな起業、自分の才能の発掘など、自らのキャリア発達の次なる段階へとつながっていることが、今まさに重要なのだ。

必要とされているのは、新しいキャリアを「探索」するための教育なのである。だからこそ「探索期」であり、このような人が「エクスプローラー[explorer]」と呼ばれる所以なのである。

このような学びが必要となるのは、人が長く生きるようになったからだけではない。むしろ、ICTやAIなどの情報技術の発達など、社会システムの変化がもたらした経験したことのないようなスピードで変化しているからである。

### □キャリアデザインの必要性

人生が長くなっても、変化が激しくなっても、その方向が見えて予測できるのであれば、問題はそれほど深刻ではない。ところが現実には、数年先もどうなっているのかもわからない時代になっっている。それどころか数か月先もわからないというのが、2019年5月現在のイギリス国民なのだ。

こうなると、偶然に生じることも想定しながら自らのキャリアをデザインしておくことが必要となってくる。偶然を積極的に受け入れることを推奨したのが、スタンフォード大学のジョ

ン・D・クランボルツというキャリア研究家で、彼の理論は「計画的偶発性理論」と呼ばれている。

キャリアデザインは、海図を見ながら航路を定めることに似ている。目的の地は同じでも、人によって航路は違っている。行く手に岩礁が見えれば、手前で舵をきればいいし、嵐が近づいてくるようなら、迂回してもいい。GPSの目的の地は変更しない。しかし、本当に、このまま航海を続けることができなければ、別の船に乗り換えても、目的の地を変更してもかまわないのだ。

いざれにしても、航海を続けるにあたって、岩礁や浅瀬の位置を事前に確認しておく、天気予報もこまめにチェックする必要があるのは当然だ。キャリアをデザインすることは、ただ人生の計画を設計するだけではないのである。大海原で遭遇するすべての危険に対応できるように、準備をしておくことである。肉体の訓練をせず、なんの装備もなく、エヴェレスト登山する人はいないのと、同じである。

### □学びと学びほぐし

最近では、「起業」を支援するセミナ



久保田 慶一  
(くぼた けいいち)  
東京藝術大学大学院修士課程を修了。フライブルク大学、ハンブルク大学、ベルリン自由大学に留学。東京学芸大学教授を経て、現在、国立音楽大学教授。音楽学博士（東京藝術大学大学院）のほか、芸術学修士（東京藝術大学大学院）、カウンセリグ修士（筑波大学大学院）、経営学修士（首都大学東京大学院）。音楽キャリア関係の著書に、「音楽とキャリア」、「モーツァルト家のキャリア教育」、「2018年問題とこれからの音楽教育」、「音大・美大卒業生のためのフリーランスの教科書」などがある。

ーなどが盛んに行われている。以前は「アントレプレヌール」というフランス語がよく使用されていたが、最近では「スタートアップ」という言葉の方がよく耳にする。こうしたセミナーにいきなり参加してみるのも、いいかもしれないが—決して無料ではない—、それよりも、ものの方や学習方法を変えられることで、これまで獲得した知識や能力をリセットすることで、新しいビジネスを創出できる下地にはなると、筆者は考えている。

これまで自分が持っていた知識が陳腐に感じたり、役に立たなくなったり思ったりすれば、むしろ積極的にこれまでの知識を一度「捨て去って」、新たな知識を獲得して、知識を再構成していくことである。このような学習方法が「アンラーニングunlearning」で、「学びほぐし」「学びなおし」と訳されている。

アンラーニングを継続していくと、人の知識はどんどん更新される。人は一生を通して、学習を継続することになり、これが「生涯学習life-long learning」へと発展していくわけである。「生涯学習」という言葉はすでに使い古

された感もあるが、いつの時代にも、その理念は人の成長にとって不可欠なものなのである。

近年では、とりわけICTの進歩が著しく、インターネットの発達によって、私たちが修得できる、あるいは修得すべき知識の量は格段に増えている。またその変化も激しく、5年前に学修したことがすぐさま時代遅れのものになってしまう。また近い将来、多くの職業がコンピュータやAIによって取って代わられると言われている。スマホなどの新しい機種を追いかけるのではなく、学習態度そのものを見直していく方がよりたやすく、新しい時代に適応できるのかもしれない。

□大学でのリカレント教育のすすめ

生涯学習の考え方やその実行をあえて話題にする必要がないほど、日本では大学等を卒業してからの学びは一般化している。前者を子どもの学習、後者を成人の学習と呼ぶことにする。

成人の学びを研究している岩崎久美子氏は、次のように、両者の違いを説明している。子どもが学習する動機は、「よい成績をとること、希望する学校のし、新しい知識との融合をはかる、「学びほぐし」であることも、忘れてはいけない。

□筆者が経験したリカレント教育

筆者は40歳代の終わりから、50歳代の前半にかけて、ふたつの社会人大学院（いずれの夜間開講）で学んだ経験がある。最初の大学院ではカウンセリング心理学、後の大学院では意思決定論を研究した。

最初の大学院に入学しようとした動機は、「現実生活の課題や問題への対応」であった。具体的には、学生の進路相談の理論や技能を学びたいというものであった。しかしふたつめの大学院では、最初の大学院で研究したことを発表させることであつたので、必ずしも「現実生活の課題や問題への対応」ではなかつたのである。いずれの場合も、入学は「自己決定的」ではあつたが、目的は子どもの学習の方に近かつたと言えるであろう。また学習教材ではこれまでの経験が役に立つたことは言うまでもないが、はじめて学習する分野であつたため、教師やテキストが必要であつた。

入試に合格することといった学習行動に対する評価、つまり、目に見える報酬といった「外発的動機づけ」(extrinsic motivation)であるのに対して、成人が学習する動機は、「このような外部からの学習の誘因(刺激)よりも、「人間の成長、自己実現といった内面的充足や満足感といった「内発的動機づけ」(intrinsic motivation)である。」(p.125)そして、子どもと成人の学びの相違を整理したのが、下の表1である。\*

では、成人が就労後に再度大学で学びなおす、いわゆる「リカレント教育」を受ける場合は、どのような教育になるのだろうか。リカレントrecurrentは英語で、「反復する」、「再発する」、「周期的に起こる」という意味である。一度治癒した病気が再び再発したり、そもそも完治は難しかったりする病気の名称に使われている。しかしリカレントcurrentは「現在の」、「今流行している」などの意味があり、リカレントは再度「時流に合わせたものにする」という意味が含まれるように思われる。「アップデート」することである。リカレント教育recurrent educationは、ときに「回流教育」や「還流教育」とも訳された

学習目的についても、大学での学生指導に役に立つたことは確かであるが、音楽大学生のキャリア支援という、これまで研究者があまり注目してこなかった分野で、はからずも先駆的な仕事をすることができたのは幸運であつた。現在のところ、本業であつた音楽学よりも、音楽キャリア支援の仕事の方が、多い。この意味で筆者が受けた大学でのリカレント教育はきわめて「投資的」であつたのである。

このような筆者の経験から、「成人の大学でのリカレント教育」の特徴を、岩崎氏の整理に準拠して整理したのが、次の表2である。

ここで大切なことは、大学での学びなおしが「投資的」であるということ。この時期がグラットンとスコットが言う「探索期」に相当し、筆者自身が「エクスプローラー」として行動していることである。つまり、自分の潜在的な能力を見出し、発見された能力を発揮できる仕事を探し求めているのだ。大学での学び直しは、短期の講座やカルチャーセンターでの学習と大いに異なる点であろう。もうひとつの大切なことは、大学あ

表1 子どもの学習と成人の学習

	子どもの学習	成人の学習
1. 自己概念*	依存的	自己決定的
2. 学習教材	教師、教科書、教材	経験(豊かな学習資源)
3. 学習方法	同年齢対象の同内容教授(標準化されたカリキュラム)	討論、問題解決事例学習、シミュレーション、ワークショップなど
4. 学習内容	教科内容の習得	現実生活の課題や問題への対応
5. 学習の目的	将来への投資	生活への即座の活用

\*「自己概念」とは「自分をどう見ているか」である。子どもが学校に通う目的は学習だけでなく、友達や給食だったりする。よって学習は自発的ではなく、環境や周囲の人間に対して「依存的」なのである。これに対して成人の学習は義務や強制からではなく、「自己決定的」ある。

表2 成人の大学でのリカレント教育

	成人の大学でのリカレント教育
1. 自己概念	自己決定的
2. 学習教材	教師、教科書、教材+経験(豊かな学習資源)
3. 学習方法	討論、問題解決事例学習、シミュレーション、ワークショップなど
4. 学習内容	現実生活の課題や問題への対応
5. 学習の目的	将来への投資

るいは大学院で学ぶことで、学位を得てきたということである。特にリカレント教育で20歳代に取得した学位とは異なる種類の学位を得ておくと、効果は絶大である。

筆者がふたつの大学院で取得した学位は「カウンセリング修士」と「経営

りする。

ここで重要なことは、リカレント教育は確かに大学卒業後に再度大学などに入学して、学業を「再発」させることであるが、同時に、新しい教育を受けて、これまでの知識をリニューアル

い、さまざまな仕事ができるようになる。これを「ポートフォリオ・キャリア」と言ったりする。複数の能力や仕事が一人の人間の中で共存している状態である。しかし、安定しているのではなく流動的で、ある能力や仕事が出して、次の段階のポートフォリオ・キャリアで中心的になることがある。こうなれば、ポートフォリオ・キャリアはプロティアン・キャリアの状態になっていると言えるのだ。畢竟、「私は○○しか担当できません」、「私は○○以外のことはわからないし、なにもできません」と、もう言えない時代になっただけで、また言わなくてもいい時代になっているわけである。

★岩崎久美子「成人の発達と学習」一般財団法人 放送大学教育振興会 2019年

★筆者のキャリア関連の著書に、『音楽とキャリア』（スタイルノート、2008年）、『2018年問題とこれからの音楽教育』（ヤマハミュージックメディア、2017年）などがある。

★「無形資産」「変身資産」「キャリア形成資産」については、拙著『大学では教えてくれない音大・美大卒業生のためのフリーランスの教科書』（ヤマハミュージックメディア、2018年）を参照してください。

「二足の草鞋を履く」というが、もはや二足の草鞋ではなく、ふたりの人間が別々の草鞋を履いているのだ。本業の音楽学をもっと研究すべきであるという心も声も聞こえてくるのであるが、キャリア支援の方が「社会に役立つという実感を受けることが多いので、このような生き方も私にとって間違っていないと思えるようになった。

これを「人生の使命」と大げさに呼ぶことができるかもしれないが、実はもっと単純なことで、私自身がさまざまな学問分野に関心をもっていて、幅広い教養を修得することに努力してきたからに他ならない。

## 2019年は社会教育法70周年

# 改訂 社会教育法解説

井内慶次郎 山本恒夫 浅井経子 共著

### 1949年6月スタートの社会教育法の「原点」を明示する

定価1080円  
(本体1000円)  
送料215円  
ISBN978-4-7937-0120-7  
B 6 判  
128ページ



社会教育法解説

◎目次◎

まえがき 再改訂にあたって

序論：社会教育法六十年  
社会教育法の制定

社会教育法の一部改正（昭和二十六年の改正 昭和  
三十四年の改正 平成十一年の改正 平成十三年の  
改正 平成二十年の改正） 生涯教育から生涯学習  
へ（平成四年生涯学習審議会答申 平成十年生涯学  
習審議会答申 平成二十年中央教育審議会答申）

本論：社会教育法の解説

第一章 総則 第二章 社会教育主事及び社会教育  
主事補 第三章 社会教育関係団体 第四章 社会  
教育委員

第五章 公民館 第六章 学校施設の利用 第七章  
通信教育

付録 新旧対照表 関係用語の解説

序論 社会教育法六十年

一 社会教育法の制定

（略）終戦、敗戦の痛恨、混迷、悲しみ  
の中から、どうやって立ち上がるか、日本  
の国家としての独立をどうやって回復  
するか、あらゆる分野で、（略）社会教  
育法の制定もその一であったといえよ  
う。社会教育法が公布施行されて、六十  
年の時が流れたが、立法に関係した人々  
の間にあった共通の思い、視点として、  
次のようなことがらをあげることができ  
よう。（一）上意下達、教化、動員の  
活動ではなく、社会教育はあくまでも、  
国民の自発的な自己教育、相互教育であ  
るべきこと（略）

◆ご注文は最寄りの書店、または日本青年館までお申し込み下さい◆  
TEL 03-6452-9021 FAX 03-6452-9026 までご注文下さい。

□プロティアン・キャリア

ライフステージが細分化され、自らの才能の開拓にはげむ「探索期」が繰り返されると、学びほぐしによる学習によって知識は更新され、あるいは経験の蓄積を通して、新しい見方や考え方も獲得されるであろう。つまり、自己成長が継続していくのだ。このような「変容的学習transformative learning」を経験することで、人はさまざまな職業や役割を経験することになると言えるであろう。こうして「プロティアン・キャリア」と呼ばれるキャリア形成も可能となる。

プロティアンとは、ギリシャ神話に登場する海神プロテウスのことである。未来を予見できた彼だが、その求めに応じるのを嫌って、すぐさま姿を変えたのである。ここからプロティアン・キャリアとは、ひとつの組織にずっと所属しているのではなく、組織を移動することで、組織内での役割を替え、自己成長を続けることを意味する。

もし真のプロティアン・キャリアを歩みたいと思うのであれば、リカレント教育を断続的に継続し、「人生1000年時代」に必要とされる「無形資産」、

なかでも「変身資産」を蓄えることが大切だ。筆者はこれを「キャリア形成資産」——具体的には、自分についての知識、多様性に富んだ人的ネットワーク、新しい経験に対して開かれた姿勢など——と呼んだりしている。★

□エンプロイアビリティの向上

このような変容的学習を継続して、変幻自在なキャリアを形成していく意味は、どこにあるのだろうか。理由を知るうえで大切なキーワードが、「エンプロイアビリティ」であろう。

エンプロイアビリティ employability は、「雇用する」という意味のエンプロイ employable と「できる」という能力を意味するアビリティ ability の合成である。つまるところ、「雇用される能力」を指している。エンプロイアビリティという資質・能力が高いということは、どんな職業にも通じる能力が高いということになる。高い人が増えれば、職業上の流動性が増し、個人のキャリアもよりプロティアンになっていくということである。

エンプロイアビリティを高めることで、一人の人間がさまざまな役割を担